談話室

年会参加のハードルを下げる： 保育室設置の試み

基礎生物学研究所 箕浦高子
(生物物理学会に保育室をつくる会 代表)

「学会保育室」とは、乳幼児を同伴する年会参加者のために、年会会場内またはその付近に子供たちが安心して過ごせる部屋を用意し、専門のベビーシッターによる保育を行うシステムである。生物物理学会では、2年前からこのような学会保育室を設置していただいている。昨年の東北大学年会では、4人の子供たちと2名のシッターさんが初対面からすぐにうち解けて、会場となった公民館の部屋や廊下を元気に遊び回る姿が見られた。

本稿ではまず、「生物物理学会に保育室をつくる会」の結成と保育室設置に向けたこの2年間の取り組みについて紹介する。そして、今後の継続的な設置に向けて、年会実行委員会と「生物物理学会に保育室をつくる会」との連携およびサポートの必要性について述べたい。

<加藤万里子さんとの出会い>

子供が産まれる前までは、年会に参加する時に悩むのはおもに旅費の工面だったのが、子供が産まれてからは一変してフットワークの重さが悩みの種となった。それでも赤ん坊の頃はおんぶ紐に縛り付けてバスター会場を回ることができた。しかし子供も成長してくると、なかなか親の意のままには動かない。長時間親の都合に付き合わせるのも難しくなってきた。かといって、まだまだ一人で放っておくわけにもいかない。ここへきて、初めて保育室の必要性を痛感した。他の研究者はどうやっているのだろうか、学会で保育室を設置している前例はないのか、インターネットで検索することにした。慶應大学助教授加藤万里子さん（天文学）による「これから学会で保育室をつくろうとしている

方のために」¹⁾という、まさに打ってつけのホームページの存在を知った。

ホームページには学会執行部の説得方法からシッター会社の探し方に至るまで、天文学会での取り組み例が事細かに報告されていた。早速それに従い行動を開始した。同じ問題を抱える学会員などに声をかけ、「生物物理学会に保育室をつくる会」を結成し、メーリングリストで連絡を取り合うことにした。まずは学会員の保育室へのニーズを確かめたいと思い、生物物理若手の会員を対象にアンケートを行った。保育室設置賛成の意見と多数の応援の声があったものの、残念ながら、その時点では実際に保育室を利用したいという会員は現れなかった。個人の力で学会全体のニーズを把握するには限界があった。利用者の見込みは不明であったが、幸い当時の年会実行委員会の承諾を得ることができ、1999年和光年会より、保育室を設置していただけることになった。

<利用規定>

年会会場に臨時の保育室を設けるためには、クリアしなければならない数々の問題があった。1つは、万が一事故が起こったらどうするのか、年会が責任を問われるようなことがあってはならない。これに対しては、まずは最善を尽くすべく、保育料が多少高くても、なるべく学会保育室の経験のあるシッター会社を選定し、万全の注意を払うようにした。また、託児中の事故に対するシッター・子供への傷害保険に加入しているシッター会社であることを必須条件とし、万一の際は保険の範囲内でのみ保障し、年会・学会はいっさい責任を負わないことを、利用者・年会双方で確認した。また、保護者のいる会場名、携帯電話などの連絡先をあらかじめ予定表に記入し、すぐに連絡を取れる体制を整えた（ただし、現在までのところ、保育中の緊急事態は起こっていない）。

子供が病気の場合はどうするのか。これも利用者にとっては大きな問題であった。多くの場合、講演を控え、代替手段がない状況での保育室利用である。あまり厳しい制限を設けて利便性が著しく損なわれるのも、望ましくない。そこで、利用者を含め、「保育室をつくる会」で十分な話し合いが行われ、学校法定伝染病の場合は利用不可、風邪など軽微な疾病の場合は利用可能 - ただし、利用者相互が気持ちよく利用できるよう、

Easy to Attend : Promotion of Child Care Service at the Annual Meetings

Takako KATO-MINOURA (BPS Child Care Promoting Committee)

National Institute for Basic Biology

事前にメーリングリストで相談をする - , 投棄は保護者の責任で行う, などといったルールを定めた。

<年会での取り組み>

1999年和光年会では実行委員会の協力のもと、会場の一室(和室楽屋)を保育室として確保していただいた。初めての設置ということもあり、問い合わせは何件もあったものの利用者は1名にとどまった。利用が少なかったため、保育料へのサポートは見送られた。しかし、前例のなかった保育室を迅速に設置していただけたことは大きな進展であった。

2000年東北大学年会では、会場内に乳幼児が過ごすのに適した部屋が見つからなかったため、会場から5分のところにある公民館を利用した。保育室利用者は4名に増え、年会予算から2万円の保育料援助があった。

来年度大阪大学での年会においても、これまで同様、保育室を設置していただく予定である。保育室も2回の実施を経て何とか軌道に乗ったと感じている。今後も保育室の設置を継続できるよう、会の活動を続けていきたい。

<今後の継続に向けて>

現在、保育室設置のアナウンス、場所の選定・確保はすべて年会実行委員会の手配による。過去2回とも、つくる会・利用者の要望を最大限考慮していただき、乳幼児に適した清潔な部屋が用意された。保育室が年会公認で設置されたという点において、つくる会・利用者として大変感謝している。

しかしながら、存続に向けて考慮すべき点は残る。保育室の設置が学会としての決定事項ではなく、その年の年会実行委員会の決定に委ねられている現状では、今後も保育室が年会に併せて毎年設置されるかどうかは不確定である。保育料への援助も、その年の実行委員会の方針や年会経費の潤沢度にかかっており、援助があるかどうかが直前まで確定しない。シッター料の相場も都市部と地方では大きく異なるため、年によって利用料が大きく変動する可能性がある。つくる会では現在のこのような状況を踏まえ、1時間あたり0~1歳児1,000円、2歳児以上1,200円の利用者負担額を定め、年会からの援助と合わせてシッター経費を支払っている。しかしこの額はつくる会メンバーで結論した「負担しうる上限」であり、年會中長時間利用するにはまだまだ高額である。援助のある他学会の場合と比べても妥当な額とは言い難い*。利用者としては、申込が皆無である場合は別として、年会にデフォルトとして保育室が設置されること、利用料は子供の数や年会予算

によらず一定のリーズナブルな金額であることが理想である。そうなる初めて、研究の計画が立ち、確実に年会参加・発表ができる保証となる。

保育室設置に係る経費は場所代とシッター代に対する補助(数万円)である。これは開催地の事情や利用者の数によって変動する。年会全体の予算から見れば少額だが、毎年必ず保育室への予算枠を確保することは、単年度会計という年会予算の性格上、難しいかもしれない。今後は学会として保育室を支援するものと位置づけていただき、他の学会の援助状況も見比べた上で、年度を超えて、一定の利用料を決定していただければと考えている。その上で、保育室経費のいっさいを年会予算で賄うこととし、利用者は学会の定めた利用料を年会に支払うシステムを提案したい。万一開催地の事情などで年会予算からの支出が困難な場合は、学会の経常費から補うこととし、利用者の負担額が頻繁に増減することのないようにしていただきたいと思っている。

<イベント企画会社の利用>

保育場所やシッター委託先の設定は、現地の情報が必須である一方で、利用者側の事情に応じた考慮も十分なされるべきである(例えば乳児が這えるような清潔な畳敷きや、活発に動きまわる年齢では広いスペースの確保など)。保育室の設置案内は、年会から学会誌や学会HPを通して迅速確実に情報提供されることを望む。今後も、利用者同士がメーリングリストを通じて十分に話し合いをもち、利用者側と年会側との相互協力体制も維持しておくことが不可欠であろう。そしてさらに将来的には、保育室の企画運営いっさいをイベント企画会社あるいはシッター会社自体に任せるということも検討してほしい。保育室の設置において必要となるさまざまな事務作業は、年会側・利用者側いずれが行うにしても、負担が大きい。毎年確実に保育室を維持していくためにも、外部委託が可能なのはそうすべきと考える。一例として、今春行われる日本外科学会総会では、航空券・宿泊の世話をする旅行会社に保育室の管理も一任するとのことである。ただし、その場合は保育室設置のアナウンスと資金援助を年会側で怠りなく用意し、保険等安全面にも注意を払い、また、利用者の利便性が損なわれないよう、利用者・年会・

* 各学会での援助状況はさまざまである。利用料が完全に無料のところもあるが、場所代の援助のみでシッター料は利用者が実費(1時間2,000円弱)負担のところもある。1時間300~700円となるように学会が援助するケースが主流である。

企画会社の三者が十分な相互連絡を取れる体制を整えることが前提となる。

<クローク同様に保育室を>

「女性科学研究者の環境改善促進のために、保育・介護サービスの充実に努力」とうたわれた日本学術会議の提言（声明²⁾）が出されたのは、7年も前、平成6年のことである。以降、生物物理学会を含むいくつかの学会で保育室の設置が少しずつ進んでいるものの、ほとんどが有志の地道な活動によるものであり、設置学会もわずかである（その中で生物物理学会での保育室設置は先進的である！）。今年度の日本学術会議総会においてようやく、「研究者に対する育児援助（例えば、保育費の補助、学会等の開催時における保育室の開設）」という内容が具体的に盛り込まれた総会決議（要望³⁾）が出された。今後はこれを受けて、多くの学会でクロークや休憩室と同様に保育室が当たり前のように設置されることを強く望んでいる。

<保育室は選択枝のひとつ>

天文学会、物理学会^{4) 6)}での取り組みが、新聞に掲載されたが、気になるのは、「ママさん研究者に朗報」というタイトルである。保育室は「ママさん」のためだけにあるのではない。父子家庭というケースはまだ少ないかもしれないが、男女共同参画社会の今、夫婦で学会参加しない場合でも、母親の社会活動も保証されるべきである。「お父さんが学会に連れて行って面倒をみてね」というケースも今後は増えるだろう。逆に、保育室があっても利用しない場合もある。祖父母ら、身近に頼れる人がいて、子供もそれを望む場合、わざわざ遠方まで子連れで行く必要はない。「年に一度の貴重な交流の場、子供抜きで夜までじっくり議論したい」という意見も聞く。また、会場内保育室というスタイルも、開催地や利用者の事情によって、柔軟に対応すべきである。近隣の託児施設に恵まれていれば、にわか仕立ての保育室より遊び友達も多く設備も整っている可能性がある。ただしその場合も保育料への援助は同様に行われるべきであろう。あくまでも、保育室は選択枝のひとつなのである。

保育室は女性のためだけのものではない。むしろ、男

女を問わず、将来の親を含めた若手研究者へのサポートである。任期制の導入など、昨今の若手研究者をとりまく状況は厳しく、そんな中で子育てもしながら研究を続けられるのかといった不安が大きく存在する。学会保育室はひとつの安心材料としても存在意義が大きいのである。学術研究の場にさまざまな角度から門戸を広げること、その意味では保育室の利用者数の多少は重要ではない。

最後に、今後保育室を利用予定の方、「生物物理学会に保育室をつくる会」に参加、協力いただける方はccc-mlにご参加ください。申込は箕浦（mtakako@nibb.ac.jp）まで。当会の活動報告・保育室設置の最新情報は

URL：http://www.eva.hi-ho.ne.jp/minoura/hoiku/

をご覧ください。今後も保育室を安定して維持していくためにも、多くの方がご理解とご協力をくださると同時に、積極的に利用をしてくださるようお願いしています。

文 献

- 1) 加藤万里子「これから学会で保育室をつくろうとしている方のために」

<http://sunrise.hc.keio.ac.jp/~mariko/gakkai/info.html>

- 2) 日本学術会議声明15-7「女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言（声明）」

<http://sunrise.hc.keio.ac.jp/~mariko/jaicows/h6seim.txt>

- 3) 日本学術会議〔第132回総会〕決議（要望）

<http://sunrise.hc.keio.ac.jp/~mariko/feminism/gakujutsu.132>

- 4) 産経新聞（1997）4月1日付記事「ママさん研究者に朗報 - 『託児室完備』の学会、増加傾向に」

<http://sunrise.hc.keio.ac.jp/~mariko/gakkai/sankei974.child.html>

- 5) 朝日新聞（2000）夕刊9月14日付記事「学会会場に託児室広がる - ママさん学者発表の場安心」

<http://www-nh.scphys.kyoto-u.ac.jp/JPSchildcare/asahi3.jpg>

- 6) 朝日新聞 新潟版（2000）9月26日付記事「パパ・ママけんきゅう発表中 - 日本物理学会、女性・夫婦会員考え 託児室初めて設置、好評」

<http://www-nh.scphys.kyoto-u.ac.jp/JPSchildcare/image/kiji2.jpg>

箕浦高子 (みのうら たかこ)

岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所細胞情報部門 助手

連絡先 : 〒444-8585 岡崎市明大寺町字西郷中38 E-mail: mtakako@nibb.ac.jp